

---

# 赤頭巾のホンネ

maki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤頭巾のホンネ

### 【Nコード】

N9485L

### 【作者名】

mak i

### 【あらすじ】

自己満です。それでもいい方だけどうぞ

**（前書き）**

ちよつとだけ成人向けです

どうやら私は一族のために必要な子供らしい。

「レミイ、お爺さんはちょっと気難しい人だけど悪い人じゃないから、しっかりお爺さんに尽くしてあげるのよ」

お母さんはとんでもない大嘘つきだった。

お爺さんとはとんでもなく酷い人だった。

なんて言えば良いのだろう、もう説明したくない。お爺さんとはとにかく私をこきつかう。それだけなら構わない。全然いい。ただ私は不運だったのだ。

お爺さんは私がお爺さんの家に初めて来たその日に、私を犯した。

お母さんに言っても何も言わなかった。私が泣き喚いていると初めて事の説明をしてくれた。

私は犯されるためにあの小屋に行かされたのだ。

危うく吐きそうになった。私は私の知らない所で行われていた親族会議で今だに親族一同に多大な影響力を持っている老人の性欲処理係に任命されたのだ。

あの老人は私が森の奥にある小屋に来るたび私を犯してから、顎でこきつかう。その間はずっとニヤニヤと嫌らしく笑っているのだ。

私の処女は老人に貪られ、そして今後もそのためだけに体を捧げなくてはならない。

「死にたいなあ……」

そんな口癖がつき始めた。

今日もいつもの様に犯された。ただいつもと違ったのは今日はお爺さんの機嫌が悪かったのだ。

お爺さんは私の尻や顔や背中を好きなようにバシバシと叩き続け、噛みつき、執拗に私を虐待した。

疲れきった私はフラフラと森の中を歩き、足が耐えきれずにその場に倒れこんだ。

座り込んでしばらくするといろんな事を考えてしまい、涙がボロボロと流れ出た。

「……うわあああーん！」

声を出して泣いたのは生まれて初めての経験だった。一度流れ出た涙はなかなか止まらない、後から後から零れ出てくる。

カサリ、と近くの林が音をたてる。私がビクツ、と肩を上げてそこを見るとそこには私の唯一の親友がいた。

「・・・・・・・・オオカミちゃん」

毛並みが尋常じゃないくらいに綺麗な銀狼、私のしている事を知って急に距離をとりはじめた同年代の連中を除いた私の唯一の親友。

「・・・・・・・・おいで、オオカミちゃん」

オオカミちゃんは素直に私に近づくと私に抱きつかれた。

オオカミちゃんはいつもの様に私に抱きつかれながら私の愚痴を聞いてくれた。

「オオカミちゃん、私の味方はオオカミちゃんだけだよ」

「オオカミちゃんだけが大好き」

数日後、森の奥の小屋には誰も居なかった。小屋の至る所には血液がぶち撒けられており、ちよつとだけ内蔵と思われる肉片が散らばっていた。

何時だっただろうか、オオカミちゃんを私が森の奥にある花畑に連れて行ったことがある。

オオカミちゃんは私が器用に手を使って花を摘むのをみて真似をしようとしたが頭の良いオオカミちゃんでもそれはさすがに無理だった。

オオカミちゃんは優しい。優しいけど大人しくする以外に相手に愛を伝える手段を知らないのだ。

だから私は走っている。きっとオオカミちゃんがお爺さんを食べてくれたんだ。それ以外に考えられない。

走って走って、花畑に出ると、

オオカミちゃんが花畑の中心でびっくりしたような目で私を見ていた。

「・・・・・・・・オオカミちゃん!!」

私は何か言いたかったんだろう。  
ただ言葉で出そうで出なくて、とりあえずいつものようにオオカ  
ミちゃんに抱きついた。

ふと、気がつくとオオカミちゃんは花を咥えていた。

「・・・・・・・・」

私はオオカミちゃんなりの優しさをかんじて、笑顔を見せてあげる。

「おいで、オオカミちゃん」

「花の摘み方を教えてあげる」



（後書き）

・・・微妙な出来。厳しいコメント待ってます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9485/>

---

赤頭巾のホンネ

2010年10月12日03時44分発行